巻き戻りの幻想殺し

神上 討魔

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オティヌスの力で、世界がなくなった後、幻想殺し（神上討魔）の力で、過去の世界に戻り救えなかった奴も救うお話。

目　次

原作前のストーリー
世界の終わり……そして。　1
一方通行　4
説得　7

原作前のストーリー
世界の終わり……そして。

「ちまちま潰すのもめんどくせぇ。まずはこの世界を壊すとするか。」
宣言通りだった。
直後に、すべてが壊れ――――――――

『世界』が、壊れた。

すべてが終わった後、何もないはずの『無』人間がいた。
「――――う・・・・う」
そう、その人間は生まれたときから特別な右手を持っている少年
上条当麻だった。
「ここは・・・？　っ！そうだ！オティヌスは！インデックス！御坂！
バードウェイ！」
上条が周りを見るが、そこにはただ『闇』が広がっているだけだった。
「何だよ……どうなってんだよ！まさか本当にオティヌスの奴……。」
「やっと目が覚めたか。
「だっ誰だ!?」
「まぁ俺はお前だよ、上条当麻。」
「おっ俺!?」
そこには、自分と同じ顔の少年がいた。
「突然で悪いが、これからお前を過去の世界にとばす。」
「はぁ!?行きなりどういうことだよ!?」
「はぁ、物分かりが悪いやつだな～。もう一度お前に、世界を救うチャンスをやるって事だ。」
「なんだって?!」
「じゃあ今から過去の世界にとばすぞ。」
「えっ!?ちょっ、ちょっと待て！」

上条がそう言った瞬間上条の体が光だした。そして上条の意識が途絶えた。

上条が目を覚ますと、そこはいつも御坂美琴が自販機蹴りを入れている公園のベンチだった。
「おいおいまじかよ、まさか本当に過去の世界なのかよ。」
『あぁ、正真正銘ここは、過去の世界だよ。』
「!!」
「その声、さっきの……。」
『あぁ、そうだよ。実は、これからのことを伝えようと思ってな。』
「!!そうだ!俺は、この世界でどうすればいいんだ?」
『そこら辺は、お前に任せる。まぁ、俺はときどきお前に助言する程度だ。ちなみに、今日は、一方通行が絶対能力進化計画に誘われている時期だ。』
「じゃあ、それを止めたら、御坂妹達全員助かるのか?」
『あぁ、そのとうりだよ。』
「なら、止めてみせる!!」
『ちなみに今、一方通行は第七学区のファミレスの裏にいるはずだ。』
「なんで、そんな事がわかるんだ?」
『……。』
「黙んなよ。怖いから。」
『そろそろ消えそうだ。最後に伝えておくことがある。アウレオルス

の時に出た、竜王の顎。それを使えるようにしたから。効果は、触れずに異能の力を消すことだ。後、幻想殺しと竜王の顎で消した異能の力は使えるようになるから。あっ、そろそろ限界だじゃあな！』

「……。さてと、まずは一方通行に実験を辞めさせるように説得しに行きますか。」

一方通行

とある夕方
　　キィィィン！
乾いた音が辺りに鳴り響いた。

「あァ？そういやぁ音、反射したままだったなぁ。」
その声の少年の周りに柄の悪い少年達が、近づいてきた。
「お前には悪いが、死んでもらうぜ！」
「「「「うおおぉぉぉぉ!!」」」」
端から見れば明らかにその少年のほうが不利である……しかし
「はぁ。本っ当に面倒クセェなぁ。」
その白い少年は恐れるどころか、どこかあきれた様子であった。
何故なら、
「覚悟しろぉ、一方通行ァァァ!!」

その少年が、最強だからである。

上条side

（一方通行……きっとあいつは俺と同じだったはずだ。小さい頃から化け物のように扱われてきっと心を閉ざしているはずだ。だから気づかせなきゃ!!父さんと母さんがそうしてくれたように!これからは、俺があいつの居場所になるんだ。）

（いたっ!一方通行……と誰だ?付いていってみるか。）

sideout

一方通行side

なんで……なんで俺を狙ってくる?

俺が、なんかしたのかァ?いや、何もしてねェだろ。

なぜ俺を狙ってくる?

黒服の男「一方通行君だね?」

（アァ?……誰だこいつ?）

（また俺の能力目当ての研究者かァ……。）

（まァ、良い。無視すりゃァ良いだろォ……。）

「君は今の現状に満足しているのかい?」

（こいつ、何言ってんだぁ。）

「『最強』の先『無敵』に興味は無いかね?」

無敵?オイオイ、こいつ頭イカレてやがンのか?

「『無敵』になれば、君を狙うものは居なくなるかもしれない。」

（……。）

「これが、詳細だよ。超電磁砲のクローンを二万体殺害することで君

は無敵に慣れる。」

（……なンだよこりゃァ。二万体のクローンの殺害だと。）

「クローンはただの人形だから、誰も悲しむ者はいないよ。」

（クローン……人形）

「気が向いたら、来てくれたまえ。」

（二万体の殺害……俺は……。）

ｓｉｄｅｏｕｔ

説得

一方通行ｓｉｄｅ
第七学区のとあるコンビニ
（クローンは人形そう言ってだが……二万体の殺害か……。）
（まぁ……それでもう誰も傷つけなくてすむなら……。）
「一方通行!!」
（はぁ……今日は良くバカが来るなァ……。）
そこにはウニみたいにツンツンした髪型の少年がいた。
「お前、本当に最強になりたいのか？」
「お前も、さっきの黒服の仲間かァ？」

「いいや、違う。俺は、お前を助けるために話に来たんだ。」
「話だとォ……。」
（何言ってんやがンだこいつ？）
「まぁとりあえず場所を変えようぜ。」グイッ
パキィィィィン！
!?テメェ今何しやがったァ？」
「手を掴んだだけだけど？」
（よし！これでベクトル操作が使えるな！）

「はぁ？てめえ一体何もンだァ!?」
（俺の反射の壁を破る奴なんか見たことも聞いたこともねェぞ!?）

「何者って……俺は、上条当麻だ！よろしくな、一方通行!!」
「はぁ！俺は、そういうことを聞いているンじゃねェ!!どこに連れて行くきだァ!?」

（絶対に実験はやらせねぇ！一方通行も妹達も救ってみせる！）
「オ、オイ！俺の話聞いてンのか？」
（こいつ後で潰す！）

数十分後
上条宅

「さてと、話を始めるか……って、なんでキレてんだ？」
「いきなり連れて来られたらキレるのは、あたりまえだろォ!!」
「あー、悪い悪い。だから、落ち着けって。」
「はぁ……。で、話って言うのはなんだ？クソつまンねェ話だったら、殺すぞ。」
「殺すって……まぁ、いいや。話って言うのは、『絶対能力進化実験』についてだ。」
「……。」
「お前は、本当に無敵になりたいのか？無敵になっちまったら本当に誰もお前に、近寄ってこなくなるぞ。」
「お前に俺の何がわかるンだァ？」
「わかるさ。全部。」
「アァ？」
「俺は、昔疫病神って言われていたんだ。俺は、不幸でさ、近くにいる人にも傷つけてしまったんだ。」
「……。」
「一方通行。お前は、その能力のせいで周りの人に化け物のように扱われてなかったか？」
「あぁ。」
「俺には、辛いことがあっても、支えてくれる人がいた。お前にも、一人や二人はいるだろう？」
「……そんな奴はいなかった。俺にか変わった奴は、皆傷つき離れていく、だから誰も寄せ付けないほどの力を求めたンだ。無敵になるためにな。」
「他人を犠牲にして強くなろうとするのは、間違っている。」
「お前には、味方がいたから、そんなことが言えるんだろぉが。」
「なら、俺がお前の味方になってやる。」
「はぁ？お前、今俺の話を聞いてたかァ？俺に近づいてきた奴は傷つ

いて、俺を罵倒して離れていったンだ!!もう誰も信じられねぇンだよ!!」
「だったら、最後に俺を信じてくれ！」
「!?」
「俺は、絶対にお前を見捨てない。俺がお前の居場所になってやる。だから俺を、信じてくれ！」
「……。」
「頼む!!!」
「……、わかった。だけど俺から離れようとすれば、容赦なく殺す！」
「わかった。ありがとう！」ギュッ
「オ、オイ！離せ！……。はぁ、今は許してやる。」
「ははっ！素直じゃねェなお前は。」
「やっぱり殺す!!」
「うおっ！不幸だー!!」
「待てっ！上条ォーー!!」